

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520331

研究課題名(和文) 十八世紀ドイツ文芸における社交性と非ヨーロッパ世界

研究課題名(英文) Sociability and the Non-European World in the German Literature in the 18th Century

研究代表者

笠原 賢介 (KASAHARA, Kensuke)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：10152620

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：1960年代以降大きく変化したドイツ啓蒙の研究史を整理し、ドイツ後期啓蒙における社交性のモチーフを、クニッゲを中心にして、カント、レッシング、シュライアーマッハーと関連させながら考察した。非ヨーロッパ世界に関しては、レッシング『カルダヌス弁護』、『賢者ナータン』、ヘルダー『人類歴史哲学考』のテキスト分析を詳細に行い、非ヨーロッパに対して開かれた彼らの視点がどのように作品化されているかを明らかにした。これを通して、彼らとドイツ後期啓蒙における社交性のモチーフとのテキスト内在的な連関を明らかにした。並行して、森鷗外におけるレッシング受容、和辻哲郎におけるヘルダー受容を考察した。

研究成果の概要(英文)：1)The texts of Knigge, Kant, Schleiermacher and Lessing were analyzed concerning the motif of sociability in the German Late-Enlightenment.

2)The views on the Non-European world of Lessing ("Rettung des Hier Cardanus" and "Nathan der Weise") and Herder ("Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit") were examined.

3)The Lessing-reception by Mori Ogai and the Herder-reception by Tetsuro Watsuji were clarified.

研究分野：ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界 近代の成立と異文化把握 比較文学・比較文化 独文学 思想史 ドイツ後期啓蒙と社交性 和辻哲郎とヘルダー 森鷗外とレッシング

1. 研究開始当初の背景

(1) ヨーロッパ 18 世紀は、啓蒙の時代として、科学技術を楽天的に信奉した時代という理解がしばしばなされる。だが、近年そのような一面的な理解を取り払って、様々な再検討の試みが行なわれている。本研究はその成果を踏まえつつ、18 世紀ドイツの作家に関して、新たな寄与を付け加えようとするものである。

(2) 考察に際しては、このような再検討の成果を踏まえながら、森鷗外と和辻哲郎によるこれらの作家の受容にも新たな光を当て、考察に間文化的な立体性を持たせる。

2. 研究の目的

(1) 啓蒙の時代の見直しは、ドイツにおいては、1960 年代に開始された。この見直しは、啓蒙の時代を科学技術万能、功利主義の時代として低く位置づけ、疾風怒涛以後のゲーテ、シラー、ドイツ・ロマン派の文学者の営みを「ドイツ的精神」の展開として称揚する 20 世紀初頭以来の支配的なパラダイムを疑問に付す過程でもあった。これによって、啓蒙の時代についての新たな視点が様々な形で提示されることとなった。18 世紀のヨーロッパを、煩瑣な儀礼に従う宮廷的社交に代わる自由な交際のあり方を模索した「社交の世紀」と捉えるのもそのような視点の一つである。本研究は、この成果を踏まえ、ドイツの後期啓蒙の作家たちについて考察を展開することによって新たな脈絡を浮かび上げさせようとするものである。

(2) 1960 年代以来のドイツにおける啓蒙の見直しのなかで、非ヨーロッパ世界像、とりわけイスラームの問題は、最近になって注目され始めたテーマであり、十分な検討がなされていない。レッシングの戯曲『賢者ナタン』は、イスラームが登場する作品として著名であるが、初期から晩年の『賢者ナタン』に至るまで持続したレッシングのイスラームへの関心、イスラーム観の形成過程は十分に辿られていない。また、ヘルダーは、啓蒙の批判者としてしばしばレッシングと対立的に論じられるが、『人類歴史哲学考』に見られるように、非ヨーロッパ世界への開かれた視点という点で連続性を持っている。2002 年に出たヴォルフガング・プロスによる『人類歴史哲学考』の浩瀚な注釈は、啓蒙とヘルダーを対立させる従来の枠組みを取り払って彼の思想のヨーロッパ的な諸源泉を発掘した労作であるが、非ヨーロッパ世界認識の源泉の究明に関しては不十分なままにとどまっている。本研究は、研究のこのような現況を踏まえ、ドイツ後期啓蒙における非ヨーロッパ世界把握について、レッシングを中心にして、ヘルダーをそれとの連続性のもとで捉えながら、明らかにしようとするものである。

(3) (1)・(2) 両研究課題は、相互に連動して遂行され、ドイツ後期啓蒙における社交

性のモチーフが、レッシング、ヘルダーの非ヨーロッパ世界把握の背景にあることが明らかにされる。

(4) (1)～(3) の課題の取り組みと連動させながら、森鷗外のクニッゲ受容、レッシング受容、和辻哲郎のヘルダー受容の解明を行い、それを(1)～(3)の課題の取り組みにフィードバックさせながら、双方向的に課題を遂行する。

3. 研究の方法

(1) 本研究においては、個別作家研究や文学史的な時代区分の枠を取り払って、18 世紀ドイツの文学的・思想的営みを、レッシング、クニッゲ、ヘルダーを中心にして、社交性と非ヨーロッパ世界像という観点から横断的に考察するものである。その際に、彼らの営みが、ドイツ語圏のみならず、それを越えたヨーロッパ的な背景から養分を得ていることに注意を払う。これらの考察視角に基づいた資料発掘と作品分析によって、当該テーマに関して、一国文学史的な研究では得にくい知見を獲得することを目指した。

(2) 同時に、近代日本における受容を、近年の啓蒙の見直しの成果を踏まえて再考する。受容の考察に際しては、上記の作家たちの作品の特質に関して、ドイツでの研究の脈絡とは異なった角度から照らし出すことを試みた。

(3) これらを遂行するに当たっては、テキストの精読と時代の脈絡の解明を連動させて行った。両者を具体化するに当たって、上記作家たちが踏まえた資料やテキストの発掘・解明を行った。

(4) その際に、啓蒙の汎ヨーロッパ的な性格に鑑みて、上記作家たちに影響を与えたドイツ語圏以外の著作にも目を配った。また、著作のドイツ語訳が、原典とともに視野に収められた。ここ数年、ドイツの図書館では 17 世紀から 18 世紀の図書のデジタル化が急速に進んでいる。本研究は、こうした動向を踏まえ、また、デジタル化されていないものに関しては、現地の図書館での調査を行い、考察を掘り下げた。

(5) 森鷗外と和辻哲郎に関しては、初出、草稿、および、蔵書の書き込みを視野に入れ、テキストの生成過程に注意を払いながら研究を遂行した。

4. 研究成果

(1) ドイツ後期啓蒙における社交性のモチーフに関しては、前期啓蒙との違いに注意を払いながらクニッゲ『人間交際術』を中心にして、カント『啓蒙とは何か』、『人間学』、『人倫の形而上学』、『判断力批判』、『シュライアマッハー』『社会的な振る舞いについての試論』、『レッシング』『エルンストとファルクフリーメーソンのための対話』を周囲に配して考察を行った。考察に際しては、フォン・ロールの宮廷儀礼書、クニッゲによるルソー

『告白』の独訳、同じくクニツゲによるダ・ポンテ『フィガロの結婚』の独訳を視野に収めた。クニツゲは、1960年代以来のドイツにおける啓蒙の見直しのなかで「再発見」された作家である。フランス革命勃発後、それを擁護する一連の論説、小説、風刺的散文を発表したことが注目されたためである。それに伴って『人間交際術』に見られる身分制批判にも目が向けられたが、同書を宮廷儀礼書から区別し、「社交の世紀」の脈絡で考察することは十分になされていない。本研究の遂行を通して、クニツゲの生涯のなかでの『人間交際術』の位置、ドイツ後期啓蒙のなかでの同書の位置に新たな光が当てられた。同時に、『エルンストとファルク』に示されたレッシングにおける社交性の問題圏が、『賢者ナタン』につながることを確認された。

(2) レッシング初期の『カルダヌス弁護』から『アダム・ノイザー』を経て『賢者ナタン』に至るレッシングの非ヨーロッパ観の形成過程が、イスラーム把握を中心にして考察された。『カルダヌス弁護』の考察に当たっては、ゴットシェートによるピエール・ベール『歴史批評辞典』の独訳を『カルダヌス弁護』の本文と比較対照することによって、レッシングが、ベールの寛容思想を継承しながら、ベールも共有していたヨーロッパの伝統的なイスラーム観を転換した過程が考察された。その際には、カルダヌ『精妙さについて』の初版本、フリードリヒ大王らによるベール『歴史批評辞典』の縮小版、レッシングが依拠したオックレー、セールなどのイスラーム研究の独訳本、レッシングが批判するフォークトの『批判的稀観本目録』などを渉猟・発掘し、考察を加えた。さらに、イスタンブールに移住した16世紀のドイツの神学者を論じた論文『アダム・ノイザー』を、ヨッヒャー『一般学識者辞典』を考慮に入れながら、考察した。これらを踏まえて、『カルダヌス弁護』から『アダム・ノイザー』を経て『賢者ナタン』に至る道筋が整理され、『賢者ナタン』の劇作品としての特質に新たな光が当てられた。

(3) 以上を踏まえて、ヘルダーの名著『人類歴史哲学考』における人類の文化の多様性を肯定するヘルダーの思想を、和辻哲郎のヘルダー受容と関連させながら、取り出す作業を行った。その際に、ヘルダーの非ヨーロッパ世界認識、非ヨーロッパ世界とヨーロッパとの相互関係、とりわけイスラーム世界とヨーロッパとの相互関係への視点に注意を払いながら、「風土」、「文化」、「啓蒙」、「歴史」、「人間性」など当作品を構成する主要概念とその相互関係を考察した。考察に当たっては、ドイツにおけるアラビア研究の先駆者ライスケの『自伝』、彼によるトゥグララーの詩の独訳、『ヨブ記・箴言考』、ヴェラスケス『スペイン文学史』など、ヘルダーが参照した文献を渉猟し、分析を加えた。また、ライプニッツ、ベール、ゲーテとの関係や『人類

歴史哲学考』の後に書かれた『人間性促進のための書簡』、『アドラステア』を視野に収めて考察を掘り下げた。

(4) 和辻哲郎のヘルダー受容に関しては、第三次『和辻哲郎全集』(1989~1992)が提示した研究水準を踏まえて、『風土』と『近代歴史哲学の先駆者 ヴィコとヘルダー』のテキストの形成過程を視野に入れ、和辻の思想展開のなかでのヘルダー受容の位置を考察した。その際には、初出の雑誌、国立国会図書館所蔵の和辻の草稿、講義ノート、法政大学和辻哲郎文庫所蔵の和辻蔵書の書き込みを視野に入れた。また、上記(3)における成果を踏まえて、和辻のヘルダー理解の特質を浮き彫りにした。

(5) 森鷗外に関しては、鷗外による『人間交際術』の翻案的抄訳『知恵袋』に着目し、上記の(1)での成果に基づいて、日本での比較文学研究の側から提示されている理解の訂正を試みた。レッシング受容に関しては、鷗外作品におけるレッシングへの言及の分析と併せて森鷗外文庫所蔵のレッシング著作集、関連書籍への書き込みを精査した。鷗外も共有している19世紀ドイツにおけるレッシング像、その後のレッシング像の変遷を視野に入れて、鷗外のレッシング評価において『賢者ナタン』が持った意味を考察した。

(6) 上記(1)~(5)の研究成果については、下記の雑誌論文、学会発表、図書においてその一端を公表した。また、上記の(1)~(3)について、また(4)の和辻哲郎のヘルダー受容について、研究成果公表のための作業を開始した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

笠原賢介、啓蒙の弁証法の「定め」と行方 (合評会 栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』評論二)、ヘーゲル哲学研究、査読有、第20巻、2014、pp.177-181

笠原賢介、グラーツの国際18世紀学会、ドイツ語訳『歴史批評辞典』のことなど、日本18世紀学会 学会ニュース、査読有、第68号、2011、pp.2-4

〔学会発表〕(計 8 件)

笠原賢介、複数性と規範 ヘルダー『イデー』をめぐって、法政哲学会、2015年6月13日、「法政大学(東京都千代田区)」(発表確定)

笠原賢介、シンポジウム 日本のヘルダー研究の現在と未来、日本ヘルダー学会、2015年5月16日、「立教大学(東京都豊島区)」

笠原賢介、ピエール・ベールと18世紀ドイツ文学、18世紀ドイツ文学研究会、2014年5月24日、「法政大学(東京都千代田区)」
笠原賢介、啓蒙の弁証法の「定め」と行方

栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』第4章～第6章への特定質問、日本ヘーゲル学会、2013年6月15日、「宇都宮大学(栃木県宇都宮市)」

笠原賢介、大塚論文「ドイツ啓蒙と自由主義」をめぐって、大陸自由主義研究会、2013年2月23日、「明治大学(東京都千代田区)」

笠原賢介、和辻哲郎とヘルダー 『風土』の形成過程における『イデー』の影響を中心にして、日本比較文学会東京支部例会、2010年12月18日、「東京大学教養学部(東京都目黒区)」

笠原賢介、18世紀ドイツ思想における社交性のモチーフ 啓蒙主義から初期ロマン主義まで、大陸自由主義研究会、2010年12月5日、「明治大学(東京都千代田区)」

笠原賢介、レッシングとピエール・ベール、18世紀ドイツ文学研究会、2010年、9月3日、「藤三旅館(岩手県花巻市)」

〔図書〕(計 2件)

笠原賢介 他(共著) Synchron, Herder und seine Wirkung / Herder and His Impact, 2014, pp. 461 (pp. 347-351)

笠原賢介 他(共訳) 法政大学出版局、カッシーラー『象徴形式の形而上学 エルンスト・カッシーラー遺稿集第1巻』、2010、pp. 462 (pp. 1-462)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笠原 賢介 (KASAHARA, Kensuke)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：10152620